The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ライティングヘルプデスク設置への取り組み : 研究発信能力の向上に向けて
Author(s)	中橋, 真穂; Andersson, Shawn
Citation	大阪大学高等教育研究. 2017, 5, p. 47-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60487
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究　5（2016），47 − 55

【教育実践レポート】

ライティングヘルプデスク設置への取り組み

― 研究発信能力の向上に向けて ―

中橋　真穂[※1]・Andersson, Shawn[※2]

Effort for Starting the Writing Help Desk: Working towards the improvement of research output ability

Maho NAKAHASHI[※1], Shawn ANDERSSON[※2]

20世紀前半から米国の大学で発展していったライティングセンターが，現在日本の大学でも徐々に設置されつつある．大阪大学工学部・工学研究科国際交流推進センターでも，学生の研究発信能力向上を目指し，平成27年にライティングヘルプデスクを開設した．本稿では，開設までの流れ，利用状況，利用者のアンケート結果などを取り上げる．そこから，現状と今後の課題について考察する．

キーワード：アカデミック・ライティング，ライティングヘルプデスク，研究発信，国際交流

Writing centers have seen long-term development over time in universities around the United States ever since their creation in the early 1920s. In recent years, such writing centers are gradually becoming popular as well in universities around Japan. In 2015, the Center for International Affairs, Graduate School of Engineering at Osaka University also started the “Writing Help Desk” for the purpose of improving their research output ability. In this paper, our goal is to present how we started the desk, the amount of students that have used the desk and the results of questionnaires. From the findings, we discuss potential future issues.

Key words：Academic writing, Writing Help Desk, Research output, International exchange.

1　はじめに

大阪大学工学研究科国際交流推進センターでは，これまで多岐にわたるプログラムを実施し，工学部学生，工学研究科大学院生への英語教育や国際交流の場を提供してきた．今年で14年目を迎える「工学英語Ⅰ」はオンライン学習形態，「工学英語Ⅱ」はCALL教室で対面形式の演習を工学研究科博士前期課程に在籍する学生向けに開講し，理系英語に特化した英語教育を進めてきた．また，学部生には「理工系学部生のための海外研究発表研修」，及び大学院生には「理工系大学院生のための海外研究発表研修」をそれぞれオーストラリア，アメリカ合衆国で実施し，英語力（4技能）の向上のみならず，研究活動に必要な英語のコミュニケーション能力の向上や，文化理解，視野拡大など理工系学生のグローバル人材育成に寄与してきた．さらに学内では，English Café, Suitaや留学生歓迎パーティー，夏祭り，忘年会などの国際交流行事の施行を通じ，国際化を図っている．

このように多岐にわたり英語教育／国際交流を実施し

所　属：[※1]工学研究科国際交流推進センター　[※2]工学研究科国際交流推進センター ランゲージサポートデスク
Affiliation : [※1]Center for International Affairs, Graduate School of Engineering
[※2]Language Support Desk, Center for International Affairs, Graduate School of Engineering,
連絡先：06-6879-8972　nakahashi-m@fsao.eng.osaka-u.ac.jp（中橋　真穂）

てきたが，今後ますますグローバル化の進展が予測されるなか，工学分野においても一層，国際学会や論文などで研究成果を世界に発信する能力が求められる．真摯に研究に取り組みどれほど秀でた研究成果を出しても，それらを的確に英語で表現できなければその論文の意義や価値が薄れてしまうのは周知の事実である．日々新しい成果が生み出される理工系の分野において，スピーディーに成果を世界発信出来る能力は，世界をリードする研究者育成の重要な鍵ともなる．

一方で，これらアウトプットを苦手とする学生が多いのも実情である．特に，英語論文の執筆に関しては，論文投稿前の差し迫った状況に置かれてはじめて，試行錯誤で進める学生も少なくない．

そこで，早急に対応が必要であるアカデミック・ライティング能力の向上を目標に，工学研究科国際交流推進センターでは「山本脩一郎・志郎教育改革基金」の助成を受け，平成27年度から「アカデミックライティングヘルプデスク」を開設した．本稿では，平成27年5月～平成28年4月におけるライティングヘルプデスク設立までの流れと現状，そして課題について報告する．

2　ライティングセンターの歴史

本題に入る前に，ライティングセンター設立の米国および日本の歴史について触れたい．ライティングセンターが最初に設立されたのは20世紀後半，米国の大学で大学生の基礎学力の差を補う手段として設置された頃にさかのぼる（Waller 2002）．当初は，リメディアル，つまり学生の不足する基礎的ライティング力を補正・修正するための対応策として，カリキュラムごとのドリルや問題集をさせることが多かった．その後，1990年代になるとカリキュラムごとではなく，大学カリキュラム横断型のライティングセンターが主流となる（Kinkead & Harris 1993）．これらの背景には1980年代に，アカデミック・ライティングにおいて従来はプロダクト（完成した原稿）について指導することが主流となっていたのに対し，プロセス（構想から完成まで）を重視した指導であるプロセスアプローチがPritchard & Honeycutt（2005）により提唱されたことが大きな一因といわれている．佐渡島・太田（2013）は，Writing as a Process運動の特徴は，「書くこと」における他者の介入を重要視する点にもあると指摘する．文章作成は独りで行うものではなく，他者の声を取り入れていく過程でもあり，他者の声（voices）を取り入れれば取り入れるほどに文章は確かで豊かになるとしている．そしてこの考え方を教育哲学者Vygotskyの「最近節発達領域」と関連付け，他者の介入により1人では書けなかった文章が書けるようになる，セッションでチューターと一緒に行ったことが次の機会では一人でできるようになる，というものであると説明する．

このアプローチにより，それぞれ文章作成の段階で指導し完成へと導く手助けを担う場としてライティングセンターは発展していった．そして現在，米国のほとんどの大学にライティングセンターが設置されている（Writing Center Japan 2015）．

これらに対し，日本の大学でライティングセンターが認知され始めたのはごく最近のことである．英語で授業を展開し，読解，聴解，発表などとともに英語でのエッセイやリサーチペーパーを必須とするいくつかの大学が，学生へのサポートのひとつとしてライティングセンターの役割に注目し，2000年代半ばに相次いでスタートさせた（吉田他 2010）．そこには，英語，日本語ともに論文やレポートなどにおいて大学で必要とされる文章力と高校までで学ぶライティングには大きな差があることが開始のきっかけだという指摘もある（吉田他 2010）．

2016年現在，ライティングセンターを設置している大学は東京大学，広島大学，津田塾大学，上智大学，関西大学，早稲田大学などが挙げられる（The writing Centers Association of Japan）．例えば早稲田大学では，国際教養学部において2004年にライティングセンターが設立され，その4年後には全学対象に規模が拡大された．英語の論文や英語での申請書などを指導対象とし，留学生に対しては日本語のライティング指導も実施している．支援者は当大学に所属する大学院生であり，一定のアカデミック・ライティング指導の授業を受けた後にチューターとしてライティングセンターで雇用される．早稲田大学のように大規模に実施しているものもあれば，学部ごとの小規模なものなど，現在は様々な形でライティング支援が実施されている．

なお，International Writing Centers Associationは，以下の6点をライティングセンターの概念として定義している．

1. チュートリアルは，1対1で実施される．
2. チューターは，コーチでありコラボレーターであり，教師ではない．
3. 各学生の個々のニーズが，チュートリアルにおけ

る焦点である.

4. 実験（experimentation）と実践（practice）が推奨される.
5. 書き手の多様な執筆活動に対応する.
6. ライティングセンターは, 学生のいかなるライティング能力のレベルにも対応する.

（Harris 1998，訳は引用者による）

また，ライティング支援の重要な基本理念として,「より良い文章を作るのではなく，より良い書き手を作る」（North 1984, p.438）ことが挙げられよう．先に述べたように支援者はプロセスを支援しながら,「書かれた文章の最終的な出来栄えよりも，書き手がひとりになったときに自分の文章の問題点が診断でき，どのようにしたらよりよい文章になるのかの方策をたてられるようにすることを重要視」（佐渡島 2009; p12）する．つまり，支援者は「自立した書き手」の育成を目指す（太田・佐渡島 2013）のである.

以上の基本的な理念や定義をもとに，各大学は学生のニーズや予算などにより適宜独自の目的や形式を掲げ，取り組んでいる.

通常は，定義にもあるように1対1で指導が実施され，支援者は専任の教員，非常勤教員，一定の研修等を受けた学生などがチューターとして担当する．利用者はセンターによって学生に限定しているもの，教員も対象としているものと様々である．利用者の来訪動機も多岐にわたり，自主的に利用する場合もあれば，授業においてライティングセンターの利用を義務付けられている場合，教員の勧めにより利用する場合などが挙げられる.

以上のように，米国で始まったライティングセンターは現在，日本の大学でも徐々に認知され始めている．各大学に合った形式で実施され始めるなど授業外において文章作成を支援する取り組みが増えつつあり，その効果が指摘されている（岩崎 2013）.

3　ライティングヘルプデスクの設置準備と運営

3-1　設置背景

本センターでは以前から，工学部・工学研究科の学生から「英語の投稿論文を確認して欲しい」「留学の申請書を書いたのでアドバイスをもらいたい」，留学生からも「発表の際の日本語の原稿を見て欲しい」といった問い合わせを度々受けていた．その都度本センターの教員が対応していたが，より体系的かつ学生が利用しやすい方法を考える必要があった．これらの状況を受け，学生に聞き取り調査を行ったところ,「指導教員に見せる前に，文章の構成，英語の形式などを確認してもらえる場がない」「最終的には研究室から添削業者に提出するが，その前に確認し自分で修正をしたい」「英語の文章の書き方が分からない」といった意見が多く挙がり，原稿を完成させる前の段階における何等かの支援の必要性が明らかになった.

以上の経緯を受け，本センターでは平成26年度からライティングヘルプデスクの開設へ向けて動き出した.

はじめに，開設に向け他大学の取り組みについて視察を実施した．さらに学内のアカデミック・ライティングに関わる先生方と直接会い，学生のライティング力やニーズ，授業での取り組みや大学全体のシステムなどについて意見をいただいた.

また，ライティングセンターに関する先行研究から開設に向けた流れや取り組みについて参考にした．例えばSimpson（2004）は，ライティングセンターはそれらを開設する背景や大学の状況などをよく把握し，それらを考慮することなしに効果的に活用はできないとし，次のような留意点をあげている.

(1) ミッション

他大学の形式を模倣するだけではなく，ライティングセンターのミッションを明白にすることが不可欠である．さらに, そのミッションは大学のミッションと一致，または支援するものである必要がある.

(2) 対象学生

対象学生の正確な把握とニーズの分析が必要である.

(3) 予算

長期的な運用を目指す上で，予算獲得方法および管理について理解しておくことが重要である.

(4) ニーズ分析

設立，運営の際には大学がライティングセンターを必要とする理由と予算・人員・設備・施設などを，学生へのアンケートや上層部の意向調査を通し把握する必要がある.

また吉田他（2010）は，ライティングセンターに最初から立派な施設や設備が必ずしも必要でない点を指摘している．多くの大学ライティングセンターでは，小規模

でスタートさせ，運営を開始後に利用の記録などの実績を残すことにより少しずつ周囲の理解を得て施設などの充実を図ったものも多い．

これらの情報と，本学の学生のニーズを照らし合わせ，大阪大学工学部・工学研究科の学生にとって必要なライティングセンターの在り方について思案を重ねた．以下，項目ごとに取り上げる．

なお便宜上，ライティングヘルプデスクを利用する学生を「利用者」，文章指導をする者を「支援者」，全体のマネージメント（予約管理等）をする者を「管理者」と標記する．

3-2　セッションの場所と時間

「ライティングヘルプデスク」と名付け，以下の場所と時間で開設した．

・場所：　工学研究科国際交流推進センター
・開架時間：月曜日から金曜日9:30～17:00，授業期間外（長期夏季休暇他）も利用可能．

3-3　支援対象文章と内容

対面セッションは1回につき45分間，支援者1人に対し，利用者1人で実施する．支援する文章と内容については，レポート，投稿論文，学会発表・国際会議・国際研究集会などのパワーポイント，抄録，博士・修士論文などの文章で，45分間のセッションで指導できる分量とした．

英語／日本語（日本語は留学生のみ）の論文の形式，文章の流れ，文法等の確認，論文執筆前の基本的な形式等の指導を支援内容とし，論文の内容（研究コンテンツ）については対象外であり各研究室の教員の指導範囲とした．また，翻訳のみの依頼や研究・教育に関係のない内容もまた対象外とした．

重要なのは，添削業者とは違いライティングヘルプデスクで実施する支援はあくまでも教育の一環とする点である．そこで，単に文章を添削するのではなく，文章の事前確認（希望者のみ）と直接会って指導する対面セッションまでを一連の流れとし，よりよい文章に向け学生自らが気付き改善できるよう支援することに重きを置いている．

3-4　利用者と支援者

利用者は，論文投稿や学会発表予定の工学部・工学研究科に所属する正規学生（学部，修士，博士課程）とする．

支援者は，博士課程に所属する英語ネイティブレベルの留学生を中心に募集をした．支援対象は文章の内容ではなく英語の構成，文法等のチェックのため，支援者自身の研究分野や理系／文系は問わない．これは，ライティングセンターの理念の一つにWriting Across the Curriculumがある点に基づく．佐渡島・太田（2013）は，この点において，ライティングには専門領域の枠を超えて共通する問題があり，ライティングを独立した一領域とみなすことができると説明する．そして，支援者は専門領域に精通している必要はなく，一読者としての立場から助言を与える支援が有効といった考え方がアメリカのライティングセンターが発展する中で確立していったとしている．つまり，利用者がどのような内容のドキュメントを持ち込んでも文章をよりよくする支援は可能であり，内容に精通している教員とは別の役割を持った存在として支援に当たることが出来ると指摘する．

以上のような過程で募集をし，応募した留学生（大学院生）に実際に日本人学生が書いた英語の文章をチェックしてもらい，アカデミック・ライティング支援に必要な英語及び文章能力が十分にあるのか確認した．

次に，この確認を通過した学生に対し，3時間のアカデミック・ライティング指導に関する研修と，1時間の実践研修を実施した．3時間のアカデミック・ライティング指導に関しては，他大学のライティングセンターにて指導を担当している英語ネイティブ講師を招き，アカデミック・ライティングとは何か，日本人学生の間違いやすいポイント，効果的な指導方法などについて実施した．

その後の1時間の実践研修では，本デスクの理念とシステムに関する説明の後，学生や本センター教員が支援者役と利用者役になり，ロールプレイをしながらセッションを想定して実施した．特に，ただ文章を添削するのではなく，対話の中で利用者が自分で気づき，改善することのできる力を養成する点に重点を置いて取り組んだ．最後に，指導法に関するチェック項目を設け，ロールプレイでそれらをクリアした学生が支援者として働き始めるといったプロセスを作り実施した．また，利用者の個人情報や研究内容などを外部に漏らさないよう，支援者へ機密事項保持誓約書への署名を依頼した．

このプロセスを実施し，最終的に5名の支援者を雇用することとなった．支援者には，1セッション（45分のセッション及び準備・片づけ計1時間）の時給を大阪大学の給与規定に従い支払うこととした．

なお，支援者自身も学生であるため学業を最優先して

もらうこと，支援を通して自身のアカデミック・ライティングのスキル向上の役にも立てて欲しいことを繰り返し伝えた．支援者，両者の双方にとって無理なく，かつ実りあるものになる環境づくりに細心の注意と配慮を心がけた．

3-5　環境

先に述べたように，日本の多くの大学が小規模でスタートし，実績を積んだのち拡大していったように，本デスクも限られた予算で可能な限り長期的に継続することを目指すため最低限の物品と規模から開始した．具体的には，本センター内のスチューデントルームの一角を利用し，パソコンやプリンターなども既にセンターにあるものを活用した．スチューデントルームは他の学生も利用するオープンスペースであるため，投稿論文などで機密事項を含むものについては別室を設け利用者の希望に応じてそこで実施できるよう配慮した．

3-6　予約システム

ライティングヘルプデスクのホームページ（予約システムCoubicを利用）を開設しそこからオンライン予約，または国際交流推進センターに来訪し直接予約をするシステムを構築した．オンライン予約の流れは以下の通りである．

図１　予約システム

1）セッション前

① 利用者がウェブ上で希望日時を選択し予約をする（原則1週間前まで，急ぎの場合は要相談）．

② 管理者が，支援者に連絡し利用者希望の日時で担当が可能かを確認する．

③ 支援者決定後，管理者から利用者に予約承認メールを送る．その際，事前に文章をチェックして欲しい場合はセッションの5日前までに原稿をメールで提出するよう案内する（希望者のみ）．

④ 支援者が，予約日までに原稿をチェックする（希望者のみ）．

2）セッション当日

① 利用者は受付を済ませ，カウンセリングシートに必要事項を記入する（文章の提出期限，種類，確認して欲しいポイント等）．

② 支援者がカウンセリングシートをもとに本日の確認事項を相談し，チェック内容の説明と指導を実施する．

③ 利用者はセッション終了後に，アンケートへ回答する．

④ 支援者は，「支援日」「利用者」「支援内容」「問題点」をパソコン上のエクセルフォーマットに入力する．

⑤ 管理者は，利用者に関する資料（カウンセリングシート，原稿など）をファイリングする．

利用者がセッション当日より前に原稿を提出し，支援者がセッションまでにその原稿をチェックするといった形式は，視察に伺った神戸大学や関西大学など他のライティングセンターでは実施していない所も多く，当日セッション利用の際に原稿を持ち込む形式が主流である．これは原稿の添削ではなく対話をしながらセッションの中で原稿を確認していくことに重点を置いているためである．しかし，本センターのライティングヘルプデスクに対するニーズとして，論文などの複雑な研究内容を含んだ原稿が多い傾向にある．そこで，事前に支援者によって原稿を確認することでよりスムーズなセッションの実施が期待できると考え，原稿の事前提出を促し，セッションまでに原稿の確認をしている．実際，複雑な論文の場合は特に支援者が事前に原稿に目を通すことで，セッションで支援すべきポイントを押さえることができ，より効率的かつ深い支援が可能であると考える．

なお，データの扱いには細心の注意を払っている．具体的には，①機密事項を含む原稿の事前確認を希望する場合はデータベースではなく紙媒体でライティングヘルプデスクに直接持参してもらい，②それを支援者がライティングヘルプデスク内で確認する，という対策を取った．また，事前確認は1時間以内で確認できる分量（1500字以内）とし，1時間分の給与が担当支援者には支払わ

れる．

これら支援者の募集，雇用，周知，ウェブシステムの管理，予約の管理，当日の受付などは国際交流推進センターの教員および事務職員が管理者として進めた．

3-7　広報活動

開設に向け，より多くの学生に認知してもらうためチラシを作成し，各専攻事務への掲示を依頼した．また，メーリングリストやKOAN（Knowledge of Osaka University Academic Nucleus）の掲示板を通して周知を行った．

図２　チラシ（表・裏）

4　利用者アンケートから

以上，開設に向け準備を進め，平成27年5月に開設が実現した．周知直後から予約が入り，平成27年5月～1年間で利用者の延べ件数は約200件（事前チェックを除く）に上った．

以下，セッション終了後に利用者に対し回答を依頼したアンケートの結果を取り上げる．

1）利用者の所属

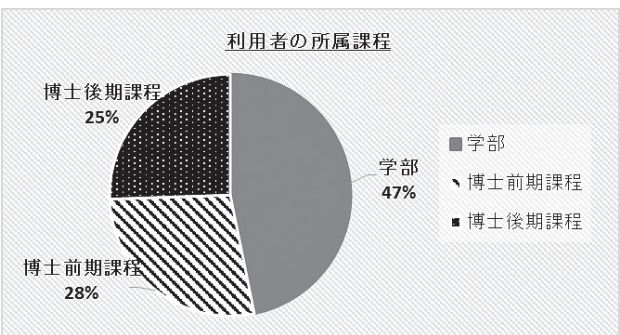

図３　利用者の所属課程

利用者の所属を見てみると，学部生が47％，大学院生が53％（博士前期課程28％，博士後期課程25％）であった．ただし，学部生の中にはIELTSやTOEFL等の英語試験対策のため繰り返し利用する学生が多い．

2）ドキュメントの種類

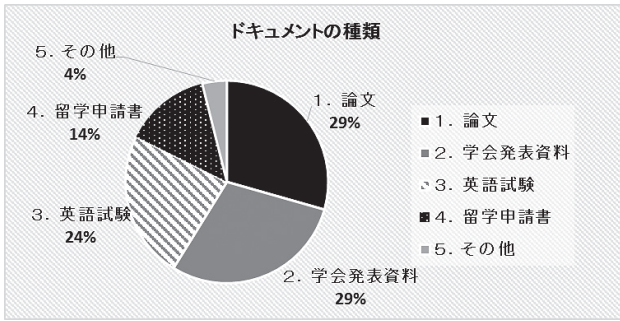

図４　ドキュメントの種類

利用者が持ち込んだドキュメントの種類は，1．論文（修士論文・博士論文，投稿論文など）が29％，2．学会発表資料（PPT及び原稿）が29％，3．英語試験（TOELFやIELTSなど）が24%，4．留学申請書（自己推薦状など）が14%，5．その他が4%と，半数以上が研究発表に関する英語のドキュメントとなった．

3）達成度

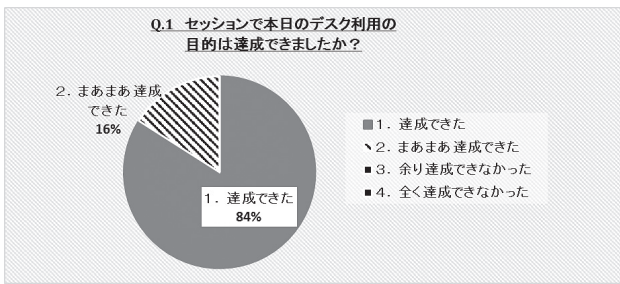

図５　達成度

セッション利用の目的への達成度については，1．達成できた84％，2．まあまあ達成できた16％，3．余り達成できなかった0％，4．全く達成できなかった0%という結果になった．2．まあまあ達成できたと回答した学生の大半は，「分量が多すぎて終わらなかった」「事前に文章を提出しなかったため時間が足りなかった．」といった声が挙がった．

4）文章改善の期待

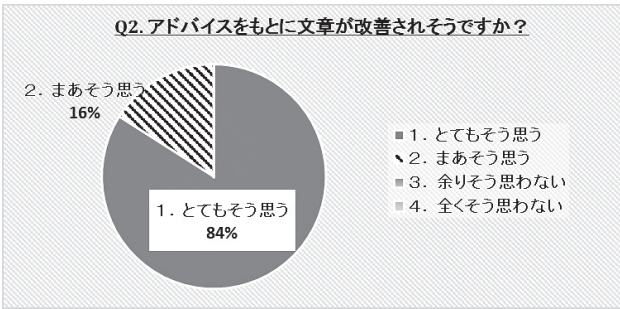

図６　文章改善の期待

デスクでの指導により文章改善への期待については，1．とてもそう思うが84％，2．まあそう思うが16％，3．余りそう思わない0％，4．全くそう思わない0％と，利用者全員が何等かの改善が期待できると回答した．

4）デスク再利用の希望

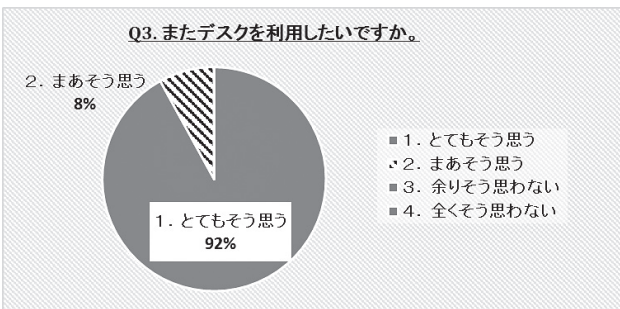

図７　再利用の希望

再度デスクを利用したいかという問いに対しては，1．とてもそう思う92％，2．まあそう思う8％，3．余りそう思わない0％，4．全くそう思わない0％と，利用者の大半が再度利用することを希望していた．

5）利用者コメント

さらに，以下のようなコメントも多く寄せられた（一部抜粋）．

自分でやっていてはわからない指摘がもらえたのでとてもためになりました！

（博士前期課程1年，学会発表PPT及び原稿）

自分の力では，気づかない誤りや不適切な表現を直していただけて助かりました．優しく丁寧に指導してもらえるし，留学生と交流もとれてよかった！

（学部4年生，交換留学申請書）

Thank you very much for your help. Actually, this program is very nice for international students who are not native speakers. Thank you again for all of staffs.

（博士後期課程2年，投稿論文）

適切なコメントと意見をいただいて，とてもありがたいです．これから論文を書くのに役立つと思います．またこのライティングヘルプデスクを利用させていただきたいと思います．

（博士後期課程3年，投稿論文）

以上のアンケート結果やコメントから分かるように，デスクを利用した学生の多くが文章の改善が期待され，目標を達成し，また利用したいと考えている．また，大阪大学に所属する留学生の大半は英語圏出身ではないこともあり（大阪大学工学部要覧　2016），日本人学生だけではなく，留学生も英語で文章を書く際に支援を必要としており，ライティングヘルプデスクが有効に機能していることも明らかとなった．さらに，利用者のコメントにもあったようにセッションを通して支援者である留学生との交流が実現するなど国際交流においての副次的な教育効果も確認された．

5　まとめと今後の課題

以上のようにライティングヘルプデスク設置に向け予算，人材，質の確保，システムの確立，周知方法など多くの課題に対し1つずつ取り組み，試行錯誤しながら開設に至った．その結果，アンケートの回答にも見られるように，現在は多くの学生のアカデミック・ライティングを支援する場として機能するまでになった．

英語論文は一般的な英文の延長ではあるものの，例えば専門用語を多用する，特有の文体がある，情報の変化が激しいなど，通常の英文には見られない特徴が多数ある．そして，そういった特徴を理解することで，より的確に論理的に表現することが可能とされている．一方で，日本の大学で求められているライティングと中学，高校で学ぶライティングには大きな乖離が指摘されている（吉田他 2010）．さらに，本ライティングヘルプデスク利用目的から，学部までの英語の授業と，大学院で投稿論文や国際学会で発表する際に求められる英語にも，大きな乖離が見られることが問題点として指摘できよう．実際に論文執筆を進めるなかで場当たり的に学ぶこともあるが，基本的な構成の習得に時間を費やしたり，

論文作成後に先輩研究者や共同研究者等に大幅な修正を頼んだりといった点でも極めて非効率的にもなりかねない．学生が，英語アカデミック・ライティングの基本的な構成方法を効率的に学び，実践を通して技術力，表現力を身に付けることで，より洗練された完成度の高い論文を自主的に書くことが可能になると考える．

そこで，これらの乖離を埋める役割として学生が必要な際にデスクを利用し，アカデミックな研究論文の原理を実践的かつ体系的に学び，英語で研究論文を書くために必要なスキルを身につけることが期待される．また，学生が自身のアカデミック・ライティング能力を客観的に評価する視座を養い，さらなる英語能力向上への積極的な態度を育成する．これらにより英語の能力のみならず，読解，研究分野に関するより深い理解，論理的な思考といった力が，相乗効果的に身に付くことが期待される．

さらに，必要に応じて積極的にデスクを利用することでこれらの能力を身に付けることは，学生の自信につながり，研究成果を国際社会に発信する積極性を養うことにも役立つと考える．

先に述べたように，日々新しい成果が生み出される工学系の分野において，スピーディーに成果を発信出来る能力は，世界をリードする研究者育成の重要な鍵ともなる．学生が将来，世界を舞台に研究成果を発信し研究や社会で大いに活躍することが波及効果として期待できる．

またコメントにも見られるように，ただ指導を受けるだけではなく，支援者である留学生と利用者である学生との間に有機的な交流が生まれていることは，注目すべき点であろう．文章作成の支援のみならず，支援者自身の国際学会発表などの経験に基づいたアドバイスや励ましの言葉も，利用者を勇気づける大きな力になっている．さらに，支援者にとっても，自身のスキルや経験を活かして指導出来る点にやりがいや喜びを感じるといった声が挙がっている．ライティング支援を通した国際交流の実現は，ライティングヘルプデスクを運営する上で大きな原動力となっている．また，効果的な支援には，信頼関係や利用者の安心感も重要なポイントであると考えるため，このようないい循環を生み出す環境づくりを今後も心がけていきたい．

一方で課題も残る．単発で終了するインテンシブコース等と異なり，デスクを設置することで長期的かつより幅広い学生を対象にサポートすることが可能であり，全体のアカデミック・ライティングの質の向上につながると考える．そのためには，長期的運用を目指した予算や人材の確保が今後の大きな課題となっていくであろう．また，学内外の理解を得，例えば図書館や正規科目との連携などによる幅広いアカデミック・ライティング支援も必要となろう．

さらに，国内のライティングセンターに関する調査・研究が非常に少ないことも指摘される（例えば，太田・佐渡島 2013，吉田他 2010など）．アメリカでは，ライティングセンターを1950年代から開設した経緯から，それらに関する研究も多い．例えば，アメリカのライティングセンターにおける理念や定義に関する研究（North 1984），効果的なセッションを実施するために必要な研修の在り方やその具体的な内容について示された先行研究（North 1982, Lipsky 2011など）がある．日本においてもライティング支援の必要性とその効果が認められている現在，徐々に開設する大学は増えてくると予想される．それに伴い，より良いライティングセンターの在り方や方法についての研究も益々重要となるであろう．ライティングセンターの運営やアカデミック・ライティング支援方法に関する調査や研究が進められると同時にそれらを実践へ応用することで，よりよいアカデミック・ライティング支援の実現が可能になると考える．

以上，実践面，研究面の双方から小規模ながらも実績を積み，将来は英語教育の一環として確立し，ライティングヘルプデスクの長期的な継続を目指したい．

受付2016.09.29／受理2017.01.20

謝辞

視察を快諾してくださった他大学の先生方，アカデミック・ライティングに関する現状などについてお話しをしてくださった大阪大学の先生方，運用にご協力いただいている教職員の皆様に御礼申し上げる．そして何より支援者として一所懸命に取り組み，利用者の喜びの声を共に喜んでくれる支援担当留学生の皆様に心より感謝申し上げたい．

注

本ライティングヘルプデスク開設は，『山本修一郎・志郎教育改革基金』のご支援により実現した．

参考文献

Waller, S. C. (2002) A Brief History of University

Writing Centers: Variety and Diversity. http://writingcenters.org/resources/starting-a-writing-cente/writing-center-concept/ (2016/11/30)

Kinkead, J. A., & Harris, J. G. (1993) *Writing Centers in Context: Twelve Case Studies*. National Council of Teachers of English.

Pritchard, R. J., & Honeycutt, R. L. (2005) The process approach to writing instruction: examining Its effectiveness. In *Handbook of writing research*. Gilford Press.

佐渡島紗織・太田裕子　(2013)『文章チュータリングの理念と実践―早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』，ひつじ書房

Writing Center Japan (2015) http://writingcenterjapan.org/writingcenter (2015/12/10 アクセス)

吉田弘子・Scott Johnston・Steve Cornwell（2010）「大学ライティングセンターに関する考察 -- その役割と目的」，『大阪経大論集』，大阪経済大学，No. 61（3），pp.99-109

The Writing Centers Association of Japan https://sites.google.com/site/wcajapan/ (2016/8/5　アクセス)

Harris, M. (1998) Slate (Support for the Learning and Teaching of English) Statement: the Concept of a Writing Center. http://writingcenters.org/resources/starting-a-writing-cente/writing-center-concept/ (2016/11/30)

North, S. M. (1984) The idea of a writing center. *College English*, 46, p. 438.

佐渡島 紗織（2009）「自立した書き手を育てる：対話による書き直し」，『国語科教育』，全国大学国語教育学会 No. 66，pp.11-18

太田裕子・佐渡島紗織（2013）「自立した書き手を育成するライティング・センターのチューター研修とチューターの意識―早稲田大学における実践事例とPAC分析」，『Waseda Global Forum（早稲田大学国際教養学部紀要）』，早稲田大学，No.9，pp.237-277

岩崎 千晶・實渕 洋次（2013）「初年次教育においてライティングセンターを活用した学生のレポートとTAによる相談記録の分析」，『日本教育工学会全国大会要綱集』，pp.249-250

Simpson, J. (2004) Assessing needs, identifying an institutional home, and developing a proposal. In B. B. Silk (Ed.), *The writing center resource manual*. Emmitsburg, MD: NWCA Press.

大阪大学大学院工学研究科・工学部　要覧（2016）

North, S. (1982) Training tutors to talk about writing. *College Composition and Communication,* 33(4): pp.434-441

Lipsky, S. (2011) *A Training guide for college tutors and peer educators*. Boston: Pearson Education, Inc.